マルクスによる先行者の「固定資本」「流動資本」カテゴリー批判

中　尾　訓　生

序

マルクスは『資本論』第2部の10章，11章でA・スミスとリカードの「固定資本」「流動資本」カテゴリーを批判している。彼は，自ら創りだした「不変資本」「可変資本」カテゴリーによって彼らの「資本」カテゴリーが陥っている混乱を整理している。混乱は，各人各様(生産者，あるいは商業者，金融業者の立場から)の経験を理論化しようとしたところから生じている。換言すると彼らの理論は，断片的経験をつなぎ合わせただけのものであり，あたかもそれは，「群盲象を撫でる」が如くである。マルクスは，『資本論』では各人各様の経験を統一的に整序する枠組を獲得していた。『資本論』を解釈するためには，この枠組を把握しておかなければならない。わが国の『資本論』解釈の多くは，「木を見て森を見ず」というようなものであって各章，各節の部分解釈は精細を極めているが，それらの解釈を集めても『資本論』の核心，全体像には到達し得ていないのである。部分解釈からは『資本論』独自のカテゴリーは，解釈できない。

というのは，部分解釈は，マルクスのカテゴリーを所与として受容しているからである。これではブルジョア経済学批判というマルクスの核心を解釈することはできない。これら独自カテゴリイーは，その形成をみておかなければ解釈できない。なぜなら，これら独自カテゴリーは，マルクスが先行者のカテゴリーを批判することで形成したのであるから。

私たち『資本論』解釈者は，マルクスのカテゴリー形成の仕方を理解し

ておかなければならないのである。

『資本論』では現代を解釈できないという人は，往々にしてその人自身の『資本論』解釈の粗雑さを露呈しているのである。『資本論』は今や，現代を解釈するにはもはや有効ではないという主張はよく聞くところであるが，私たちを納得させるためには『資本論』の枠組，つまり『資本論』のパラダイムが，現代を解釈するには有効ではないことを提示しなければならない。

私は，本稿でこの枠組を成立させているところのものを明らかにするつもりである。換言すると，マルクスがパラダイムを形成するときの根元を明らかにするつもりである。この点については，実はマルクス自身が，語っているのである。彼は「商品に表示された労働の二重性」と「労働過程と価値増殖過程」に連なる論理こそ『資本論』に貫徹する赤い糸，即ち『資本論』を成立せしめているところのものであると云っている。[1)]

実は，私はこの論理の内に「枠組」を読み取ったのである。

本稿は，先行者の「固定資本」と「流動資本」カテゴリーの検討を通じてこれに接近するつもりである。したがって，『資本論』第2部の10章，11章だけでなく，『資本論』準備ノートである『要綱』のこれに関連する論述を取り上げなければならない。『資本論』「1章2節」の「商品に含まれている労働の二重性は，私によってはじめて批判的に論証されたものである。この点は，経済学の理解にとって決定的な跳躍点である」という一文は，『資本論』の展開におけるその重要性を示しているにもかかわらず，これまで『資本論』解釈者によってほとんど取り上げられていない。解釈者は，「労働の二重性」については論じているのであるが，「表示された」ということの意味を解釈していないのである。　これを解釈するためには『要綱』を取り上げざるを得ないのである。なぜなら，商品や貨幣カテゴリーをはじめとした『資本論』を構成している諸カテゴリーは，『要綱』において形成されているのである。つまり，ここでは先行者の商品，貨幣カテゴリー

1）『資本論にかんする手紙』（上）岡崎・訳．159頁．国民文庫

は彼らの枠組から新たな枠組に移しかえられているのである。

先行者のカテゴリーはマルクスにとっては用語である。これらの用語がマルクスの枠組に位置づけられたとき，経済学批判のカテゴリーとして再生するのである。このようにしてマルクス固有のカテゴリーが形成されていくのである。

この形成過程において「労働」が重要な役割をはたしているのであるが，『資本論』からこれを解釈することは難しい。

『資本論』の課題は，マルクスが述べているようにブルジョア経済学の諸カテゴリーを批判することであり，近代社会の運動法則を解明することであった。

注意すべきことは「カテゴリー批判」と「運動法則の解明」は，別々の課題ではないということである。すなわち，ブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判は，近代社会の運動法則の解明でもあるということである。

したがって，マルクス「経済学」という呼称は，『資本論』の課題を経済法則の解明だけにあるとする印象を与えることになり，適切ではない。経済法則の解明は主体を切り離して，つまり主体を所与としてなされるのであるが，諸カテゴリーの批判は主体が考察の対象とならざるを得ないのである。

1　固定資本，流動資本とは

マルクスは，『資本論』において「不変資本」「可変資本」カテゴリーに立脚してA・スミス，D・リカードの「固定資本」「流動資本」カテゴリーを批判し，整理している。彼らは，固定資本，流動資本によって経済再生産や経済発展を明らかにしようとしていた。マルクスにあって剰余価値（利潤）の源泉と経済過程（生産，分配，消費の過程）が価値の循環として把握されたということは「資本」「不変資本」「可変資本」カテゴリーが，確立したということである。「資本」とは「絶えざる価値増殖体」であり，原

料，補助材料，労働手段に投下された資本が，「不変資本」である。労働力に投下された資本が，「可変資本」である。これを前提にすると機械，労働手段に投下された資本を「固定資本」と云い，労働賃金，原材料に投下された資本を「流動資本」と規定することに困難はない。「固定資本」「流動資本」は，生産過程に投下されている価値の回転時間の差違による区別となる。

マルクスが，ケネーを評価するのはこの区別をはっきりさせているからである。

「ケネーにあっては固定資本と流動資本との区別が，本源的投資（avances primitives）と，年々的投資（avances annuelles）として現れる。彼は，この区別を正当にも生産資本－直接的生産過程に合体された資本－の内部における区別として叙述する」[2]と述べている。私たちは，このような「固定資本」「流動資本」の区別だてに達することは難しいことではないと思うのであるが，この区別は二つの事柄を明確にしなければならない。それは価値の源泉と価値の回転である。これは，マルクスの先行者にとっては容易なことではなかった。

A・スミスをみてみよう。

彼は，「固定資本」「流動資本」を「生産資本」「流通資本」と同一視している。同一視は，次のような「資本」把握から生じている。「資本はつねにある一つの形態で，彼の手をはなれ，もう一つ別の形態でその手に帰って来るのであって，それが彼に，ある利潤をもたらすことができるのは，このような流動，つまり継続的交換のおかげによってだけなのである」[3]

このように彼は，資本を経験的，視覚的に把握している。したがって固

2）K・マルクス『資本論』2巻，向坂・訳，220頁，岩波書店

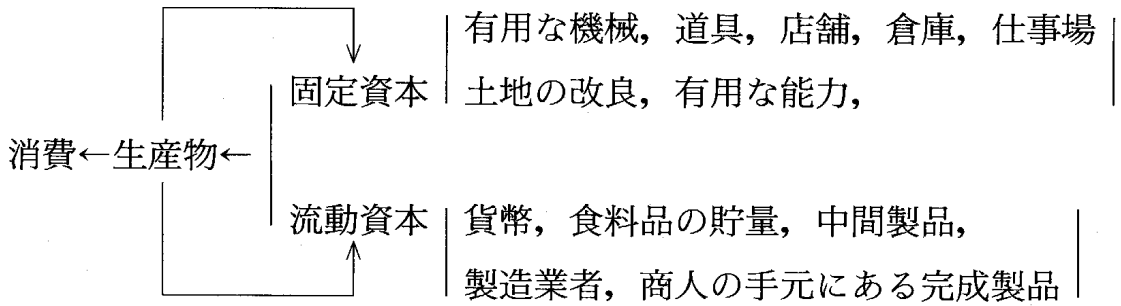
3）A・スミス『諸国民の富』I 449頁．大内・訳．岩波書店，A・Smith『An inquiry into the nature and cause of the wealth of nations』
経験的，知覚的に把握して次ぎのようにも述べている。ストックが「将来の利潤を得るために投下されるとすれば，それは使用者のもとにとどまることによってか，彼のもとから離されることによって，この利潤を得なければならない。前の場合にはそれは固定資本であり，後のばあいにはそれは流動資本である。」同上，449頁

定資本も次のように把握されている。「主人を替えることなしに，つまりもうそれ以上流通することなしに収入または利潤をもたらすような諸物」であると。彼は，具体的イメージにとらわれた素材の変態に注意を奪われている。ここでの素材の変態とは，例えば綿花，綿糸，綿布，上衣という生産による変態のイメージと交換による変態イメージから成っている，つまり財貨を調達し，製造し，販売するという過程である。

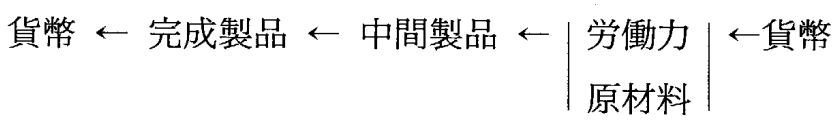
イメージは社会全体に拡大され，経済再生産の説明となる。スミスは，経験的視覚的イメージに妨げられて素材の変態は，価値循環の現象形態であると認識することはできなかった。

彼のイメージを図示すると以下のようになる。

図－1



図－2



図(1)で示されているように全体としての再生産が，素材の変態として説明されている。図(2)は，変態が交換から類推されてイメージされたものである。

リカードは，生産物の三階級への分配を明らかにするという自己の課題を遂行するにあたってスミスのような素材変態観念を必要としていない。

「固定資本」と「流動資本」についてのリカードの論述をみておく。

彼の論述は，スミスに比してはるかに論理的である。彼は，利潤の源泉について論じることはしない。彼は，利潤の存在を前提にしている，つまり利潤率≧0を前提にしている。これが，源泉問題に関わらないで分配論に焦点を据えさせ，論述を明確にしているのである。

「固定資本」とは建物，機械であり，「流動資本」とは賃金のことである。投下された資本価値が一度に生産物に移譲されるなら，これは「流動資本」である。

「固定資本」の場合，価値補塡は漸次的に行われる。したがって，利潤は前提であるから，マルクスの資本の有機的構成（不変資本／可変資本）は，(固定資本／流動資本)と同視される。リカードにおいては，スミスのような素材カテゴリーと価値カテゴリーの未分離，混在は見られない。生産物の三階級への分配に焦点を据えているリカード理論は，固定資本と流動資本の規定もこの点からのアプローチに限定されている。リカードはブルジョア経済学を完成させたというマルクスの評価は，その理論の骨組みが抽象的労働時間から成っていることとブルジョアジーの意図に反して資本主義経済は，定常状態に至ることを結論づけていることによる。マルクスの高い評価にもかかわらず，リカードの労働価値論は，マルクスの労働価値論とは性格を全く異にするものなのである。もちろん，この点はマルクス自身充分承知しているところである。リカード理論においては尺度としての労働価値は，分配論のための分析用具であり，したがって他のもので代替えされる。これは，リカード理論を発展させたスラッファが，明らかにしているとうりである。マルクスの労働論が，担っているようなブルジョア社会を批判する視点は，彼の理論には存在していない。換言するとリカードの理論には主体としての人間は登場しない，すなわち，「生きた労働」，「死んだ労働」カテゴリーの対抗関係は存在しないし，ブルジョア経済は「死んだ労働」によって「生きた労働」が支配されている体系であるという認識に至るきっかけとなるようなものもないのである。むしろリ

カードは，そのような認識は，理論の純粋化を妨げるものとして意識的に排除しているのである。リカードは，彼以前の経済学者が，大いに取り上げた「富」についての考察，すなわち生産的労働，不生産的労働についての考察に関わっていない，つまり利潤の源泉についての考察を避け得ている。だからこそ，リカードの労働価値論は，分析用具として徹底され得たのである。

マルクスの労働価値論は，リカードとは相違して前述の二つの課題を担っている。本稿は，マルクスが先行者の「固定資本」「流動資本」カテゴリーの検討を通じて二つの課題に如何に迫っているかをみている。

2　『要綱』の固定資本と流動資本

『資本論』のカテゴリーに立脚して『要綱』を解釈すると『資本論』の核心を見落とすおそれがある。『要綱』の叙述は未熟で『資本論』に至って完成するものであると単純に解釈することは『要綱』の豊かな素材（叙述）を無に帰してしまうおそれがある。もちろん，『資本論』からの解釈は，すべて無駄であるというのではないが，ここではマルクスの論理の核心を把握するために『要綱』を解釈することにする。

マルクスが，先行者の論述を解釈するとき，解釈は，ある目的をもってなされている。他方，その解釈の展開にさいしては，論理的であろうとする。

私たちが，『要綱』の「固定資本」「流動資本」を出来上がっている「不変資本」「可変資本」から解釈すると彼の「固定資本」「流動資本」の叙述は，「不変資本」「可変資本」として完成する途上の叙述であると往々に解釈して能事畢としてしまう。私たちは，彼が先行者のカテゴリーを批判し，自己のカテゴリー形成をどのようにしたのかを解釈しなければならない。彼が，始めに設定していた目的が，カテゴリー批判，カテゴリー形成に如何に作用しているかを解釈しなければならない。したがって私たちは，『資

本論』を解釈するとき，彼の設定した目的が，論理の外に存しているのではなく，論理の内にあって論理を如何に形成しているかという点に注意すべきなのである。

私が，ここで目的と云うのはカテゴリーを形成する動因のことを云っている。

前述しているようにマルクスの論理の核心とは(一)ブルジョア経済学の諸カテゴリー批判が，(二)近代社会の運動法則の解明でもあるということであった。マルクス経済学は(一)を無視して(二)を経済的に解明しようとするものである。私たちにとって『要綱』が，重視されるべき所以は(一)に立脚して(二)を把握しようとしている苦闘の論述を読むことができるからである。(一)と(二)は「労働」カテゴリーによって不可分なものと成っている。[4)]

私たちは『要綱』においてカテゴリー形成の動因は，「労働」であることを知るであろう。この動因としての「労働」をマルクスが，どのように把握していたかということは『要綱』を解釈するさいの要点である。

これについては後述する。

マルクスは，与えられている用語（カテゴリー）をひとまず受容して，それら用語（カテゴリー）に先行者とは違った意味を付与しようとする。彼は，固定資本と流動資本にいかなる意味を付与しようとしているのであろうか。

彼は，固定資本，流動資本の検討の段階で既に個人を規定している全体的なるものを把握していた。全体的なるものとは「貨幣」であり，「資本」なのである。例えば，ロビンソン・クルーソーを想定する経済理論は，既に批判ずみであった。マルクスは，資本が主体であって個人，あるいはロビンソン・クルーソーは資本に規定された存在であるとの認識には達していた。[5)] マルクスは，この資本を「流動資本」と呼んでいる。「主体としては，すなわち，この運動のさまざまの局面を統括する価値，この運動のなかで

4）拙著『資本主義社会の再生産と人権観念』「4章」晃陽書房
5）拙稿「マルクス貨幣論の成立に関する一考察」所収『経済論究』26号，1971

自己を保持しかつ倍加する価値としては，ある種の円環運動を描いて——螺旋すなわち拡大していく円環として——進行するこれらの転換の主体としては，資本は流動資本である」[6)]

マルクスは上述のように「資本」の意味をはっきりさせている点で先行者を越えているのであるが，固定資本，流動資本という彼らの用語にいまだ拘束されているのである。換言すると素材の変態と価値の循環についての認識が整理されていないのである。それが，次のような晦渋な説明となっているのである。「流動および固定という規定は，まず第一には，二つの規定の下に——特殊的種類の二つの資本として，二つの特殊的種類における資本としてではなく，同じ資本の異なった形態上の諸規定として——措定された資本そのもの，即ち一つには過程の統一として措定され，次には過程の特殊的局面として，統一としての自己からは区別されたものとしての資本そのものとして措定された資本そのもの以外のなにものでもないということ——このことは，経済学のなかに多くの混乱を引き起こしてきた。」[7)]

マルクスは，この混乱を対象を変革する主体（労働）という立場によって認識し得ている。そして混乱は，不変資本，可変資本というカテゴリーによって整理されるのである。『資本論』から『要綱』を見るとき，すなわち『資本論』に結実するものとして『要綱』の叙述を整理することは困難ではない。しかし，『資本論』の叙述から，『資本論』を支えている核を摘出することは『要綱』の叙述の単なる整理からは見出すことはできない。核とは労働の二面的性質のことであると私は考えているのであるが，そもさい要点は主体において労働の二面的性質が拮抗しているということである。

「流動資本」という用語に拘束されているが，資本は，生産，流通の過

6）マルクス，『資本論草稿集，2』358頁．大月書店，資本論草稿集翻訳委員会，1993．KAREL MARX, Ökonomische Manuskripte 1857／58，Teil 2, Dietz Verlag, 1981

7）前掲『資本論草稿集，2』361頁

程を統一する主体であるという認識は，先行者にはないものであり，この認識が「労働の二面的性質」によって論理化されるのである。

「流動資本」に対して「固定資本」は，円環運動の各局面に固定された資本のことであり，主体としての資本の否定でもある。彼は次のように云う。「資本がこのように流通（円環）の全体としては流動資本であり，ある局面から他の局面への移行であるとすれば，資本はまた同様に，どの局面でも，特殊的姿態に封じこめられたものとして，ある一つの規定性のなかに措定されているのであって，そのような規定性は運動全体の主体としての資本の否定である。」[8)]

彼は，彼らとは全く異なった意味をこれら用語に与えようとしているのであるが，彼自身の資本カテゴリーを形成するためには，先行者の固定資本，流動資本の用語からの拘束を脱しなければならない。彼は，彼自身のパラダイム（解釈体系）を作り上げる一歩手前まできている。実際，先行者のように「流動資本」を「流通資本」と混同することのないようにとわざわざ付け加えている。「ここでは，流動しつつあるということは，資本が生産局面から区別された本来的な流通局面のなかにあるといったような意味で理解されてはならない」と述べている。先行者の素材と経験に幻惑された資本規定－例えば，スミスの資本規定－からは脱しているが，先行者の用語に拘束されて完成した資本規定には達しないでいる状況は，次の引用しているところででよくわかるであろう。「流動資本と固定資本との区別立ては，まず第一には，資本が過程の統一として現れるのか，それとも過程の特定の契機として現れるのかに応じてそれが受け取る形態規定として現れるのである。」[9)]いうまでもなく，「資本が過程の統一」として現れるというのは「流動資本」ではなく，「資本」規定そのものである。

「流動資本」「固定資本」についての先行者の規定は，各人（生産者，金融業者，商業者）の立場からの知覚，経験に基づいて意味を与えられているのであって，したがって，これからはスミスのV＋Mのドグマが示してい

8）前掲『資本論草稿集，2』359頁
9）前掲『資本論草稿集，2』360頁

るように全体としての資本の再生産は，把握され得ないのである。[10] 全体としての資本の再生産を把握するには，個々人の知覚，経験を越える抽象力によらなければならない。

「ブルジョア経済の多数の現象」を理解するためには諸資本の絡まった動きを秩序だてる「解釈体系（パラダイム）」が必要なのである。

私たちは，次節でこのマルクス特有の「解釈体系」について述べるつもりである。「過程を統一する主体としての資本」の世界を超えでようとする主体（生きた労働）が，この解釈体系の構築には重要な役割を果たしてい

10）シスモンディによると固定資本は「労働を一層容易かつ生産的にする家屋・工場・道具に供されたもの，徐々に消耗」するものである。「流動資本はこれに反して絶えず直接に人の用に供される。それは労働者の消費元本に変わるのであって，彼にとってはそれは彼の賃金を構成し，彼の所得たる労働と交換にそれを獲得するのである。」シスモンディ『政治経済学新原理』（上）61頁，山口，菅間・訳，慶応書房．1942 J. C.L. Simonde de Sismondi『Nouveaux Principes D'Economie Politique,ou de la Richesse dans ses Rapports avec la Population』1819．マルサスは云う。「固定資本は利潤を目的として使用される資材のうち，それが所有者の手にとどまるかぎりこのような利潤を生じる部分。流動資本は利潤を目的として使用される資材のうち，手ばなされてはじめてこのような利潤を生じる部分。」マルサス『経済学における諸定義』175頁．玉野井・訳．岩波文庫．T.R.Malthus『Definitions in Political Economy』1827．

セーによると「資本とは前もって獲得されたある価値額のことである。」「固定資本（Le capital engage）とは企業が存続するかぎり，その企業経営のために使用されるものであって，しかも損失を伴わずにはある別の企業での使用のために先の企業から撤回されることのできないような，建物や機械から成る価値のことである。」企業者が，固定資本を回収するのは「彼が自己の企業元本（Le fonds de son entreprise）を販売」することによってである。「流動資本（Le capital circulant）は貨幣形態で回収せられてきてその企業の存続期間中，なん度も繰り返して使用される価値額のことです。原料や労働賃金に当てられる価値がそれです。生産物が販売されるたびに，かかる販売によって企業者は」これらの価値を回収する。ジャン・バティスト・セー『経済学問答』39頁．堀，橋本・訳．現代書館．1967．Jean-Baptiste Say『Catechisme d'economie politique,』

リカードによると「一国の資本は，その耐久性の大小におうじて，固定資本または流動資本のいずれかである，・・・・・・流動資本と固定資本との区別がどこで始まるのか，それを厳密に定義することは困難である。」リカード『リカード全集Ⅰ』堀・訳，170頁．雄松堂．1972．David Ricardo「ON THE PRINCIPLES OF POLITICAL ECONOMY AND TAXATION」『The Works and Correspondence of David Ricardo. 10』

edited by Piero Sraffa. Cambridge, at the University Press.

るのである。先行者の解釈体系は，いうまでもなく「主体としての資本」の世界（＝三位一体の世界）を所与としている。三位一体の世界を超えでようとする主体は，資本主義経済の発展とともに巨大化する固定資本が，主体に及ぼす作用によってある程度，論じられてもいる。

3　カテゴリー形成の動因としての「労働」

労働材料，労働手段，および生きた労働というこれら質的に異なった要素の動的な統一が，労働過程である。マルクスは，先行者のカテゴリー批判を通じてこの労働過程を包摂しているものの存在を想定した。これを彼は資本と呼んだ。

固定資本の巨大化（機械化）は，富の増大，労働時間の短縮をもたらすと一般に説明されるのであるが，マルクスから見るとこの説明は，現象をなぞっただけのものである。彼は，資本のもとでは「死んだ労働＝機械」によって「生きた労働」が支配されていると云う。すなわち，人間本性は，機械体系によって抑圧されている。この点を「生きた労働」から「死んだ労働」への主体の転換として彼は，次のように述べる。「機械は，どの点から見ても，個々の労働者の労働手段としては現れない。機械の種差は，労働手段の場合とは違って，客体にたいする労働者の活動を媒介することではけっしてないのである。むしろ労働者のこの活動のほうが，もはや機械の労働を，つまり原料に対する機械の作用を媒介するにすぎないものとして措定されているのである。」「労働は，ただ意識ある器官として，機械体系の多くの点に個々の生きた労働者のかたちで散りばめられて現れているにすぎない。」「機械装置において，対象化された労働（死んだ労働）は労働過程それ自体の生きた労働にたいし，この過程を支配する力として対立する。・・・・・・・・・・・・・・・・・機械装置においては対象化された労働（死んだ労働）が，生きた労働にたいし，支配する力として・・・・素材的に対抗する。・・・社会的頭脳の一般的生産諸力である知識と熟練の

蓄積は，このようにして労働に対立して資本に吸収され，・・・・・・・・・固定資本の性質としてあらわれる」[11)]

このような認識は，主体の内在的弁証法的関係から，すなわち「死んだ労働」と「生きた労働」の二面的性質の拮抗の認識に基づいて可能となっている。

彼は，人間を労働において把握する。それは，労働は自己創造，自己実現の活動，すなわち，諸個人が自己自身を創造していく活動であるという把握である。繰り返すが，このような労働把握は，「死んだ労働」の世界と対照させるから意味を持っているのである。換言すると，かかる「労働」把握が，社会（死んだ労働の世界）解釈の基点となっている。社会解釈において「労働」が，このような役割を担っていることについてプチは，次のように述べている。「労働の本質は，経済システムの中で危機にさらされると同時に，その中で，この危機そのものを通して自己自身を感じることによって自己を顕現させるのである。労働の現実的諸条件の中で労働者が実際に体験する不満足が労働の本質を顕示する」ということであるが，見落としてならないことは次のことである。「人間的労働の本来の相互主観的な様態が顕示されるのは資本の利益の為に現実に搾取されて生産性の要因として搾取されている人間的な連帯性のその失われた意味を想像力において回復する人にとってのみである」ということ。[12)]

人間の本源性である労働に立脚した解釈体系はこのような想像力が結実したものである。資本制経済の下で，唯一非資本主義的なるものは，「生きた労働」であるが，「生きた労働」は，労働の対象的諸条件と結合するや否や「死んだ労働」に転換する。主体性の転換が，「労働者から機械の形態をとる資本」へ向かって絶えず生ずる。生きた労働者の活動であったもの，それが機械の活動となる。

11）前掲『資本論草稿集，2』475頁

12）J-L・プチ『労働の現象学』48頁．49頁．今村・松島・訳．法政大学出版局．
Jean-Luc Petit『Du Travail Vivant au Systēme des Actions』Éditions du Seuil. 1980

資本制経済がうまく作動すればするほど，労働過程（価値形成過程）で体験する彼らの苦悩，疎外は深まる。「労働者たちは自分たちのさまざまな労働の結合のただ中に置かれることで自分たちの労働の協同化が，協同化された自分たちの労働ではないという耐え難い経験をするのである。彼らが自分たちの労働であるということのもつ主体的性格，したがって，労働者であるという彼ら自身の主体的性格が奪い取られることを感じるのは，その性格が「彼らのもの」である以前に，協同化された労働そのものである限りにおいてである。」[13]しかし，他方ではこの疎外感が「生きた労働」の源泉である。

プチは，生きた労働に立脚した生活者こそが，死んだ労働（価値）の世界を超える構想力を提示し得るという。先行者達の経済カテゴリーは，マルクスによると「死んだ労働＝資本」世界を表すカテゴリーである。マルクスは，彼らのカテゴリーを「生きた労働」の視点から検討していく。例えば，自由についてみると，彼らの理論においては自由は，労働の内に存在するなどという発想は生じない。

彼らは，労働過程の外で，つまり休息するとき，人は自由を感得すると考える。

だから，彼らにとって労働は，忌避されるものなのである。人は，労働過程では創造的主体ではなく，機械に使われる存在であるということになる。このようにマルクスは，「生きた労働」にとって所与である資本（死んだ労働）の世界に対して「生きた労働」からの世界を構想する。すなわち，資本の世界の意味体系に対して「生きた労働」からの意味体系を構築して彼らの用語に新たな意味を与えていく。例えば，マルクスは固定資本及びそれの効果について次ぎのようにのべている。「労働者は資本家と分かち合う仲にあるのだ，なぜなら資本家は固定資本－（これ自体が労働の生産物であり，資本によって取得されたにすぎない他人の労働なのだ）－によって，労働者に彼の労働を軽減させ－（むしろ資本家は機械によって，労働

13）プチ，前掲書，43頁

から，いっさいの自立性と魅力的な性格とを奪いとるのだ）－あるいは彼の労働を短縮させるからだ，というのは，このうえなくばかげたブルジョア的きまり文句である。それどころか，資本が機械を充用するのは，機械が労働者に，資本のために労働する彼の時間を増大させ，彼の時間のうち，彼が自分に属さない時間にたいする様態で関わる部分を増大させ，彼が他者のために働く時間を延長することができるようにさせるかぎりにおいてでしかないのである。」[14]このようにマルクスは，事態（死んだ労働の世界）を「生きた労働」の視点から見ていく。

人間は，自己の本質を自己自身の「生きた労働」をとおして創造する。この本質は，固定的な本性ないし本質ではなくて，むしろこの「生きた労働」の結果としてそれ自身変化する本質である。つまり，個人は「死んだ労働」によって経済を発展させながら，「生きた労働」による世界を構想し，「死んだ労働」の世界を克服しようとするのである。「生きた労働」は「資本（死んだ労働）」によって取り込まれ，「資本の世界」を再生するが，他面，「資本の世界」を越えようとする。もちろん，このような認識は，「生きた労働」によって根拠づけられている。かかる「生きた労働」と「死んだ労働」の弁証法的関係こそが，ブルジョア経済学批判の根底にある。本稿は，この弁証法的関係は，個人に内在していると考えている。換言すると，個人は「生きた労働」と「死んだ労働」を内的に拮抗させている存在である。「生きた労働」は，資本によって絶えず抑圧されるのであるが，人間の本性であるが故に決して消失することはなく，抑圧を克服しようとする性向を持っている。かかる意味において「生きた労働」は，資本世界を表現している諸カテゴリーを批判する。先行者の「富」把握とマルクスの「富」把握の相違が，これをよく示している。「他人の労働時間の盗みは，新たに発展した，大工業それ自身によって創造されたこの基礎に比べれば，みすぼらしい基礎に見える。直接的形態における労働が富の偉大な源泉であることをやめてしまえば，労働時間は富の尺度であることを，だからま

14）前掲『資本論草稿集，2』484頁

た交換価値は使用価値の（尺度）であることを，やめるし，またやめざるをえない。大衆の剰余労働はすでに一般的富の発展のための条件であることをやめてしまったし，同様にまた，少数者の非労働は人間の頭脳の一般的諸力の発展のための条件であることをやめてしまった。それとともに交換価値を土台とする生産は崩壊し，直接的な物質的生産過程それ自体から，窮迫性と対抗性という形態がはぎとられる。諸個人の自由な発展，だからまた，剰余労働を生み出すために必要労働時間を縮減することではなくて，そもそも社会的必要労働の最小限への縮減。」[15)]

「資本の傾向はつねに，一方では，自由に処分できる時間を創造することであるが，他方では，それを剰余労働に転化する事である。資本は前者の点でうまく成功しすぎると，剰余生産に苦しむことになるのであり，その場合，剰余労働が資本によって価値実現されえないので・・・」[16)]マルクスは「死んだ労働世界」からの脱出の方途に言及しているのである。

「生きた労働」としての労働（活動）とは，三位一体の世界を批判することでもある。したがって，マルクス独自のカテゴリー（例えば，商品，貨幣，資本，・・・・）は，活動（具体的有用労働）によって与えられる意味を内包している。

私が『要綱』を取り上げたのは，この弁証法的関係，あるいは内的拮抗性が，経済学批判を遂行せしめているということ，これを『資本論』で読み取ることは難しく，カテゴリーを形成している『要綱』で読み取ることができるからである。

マルクスの課題は「死んだ労働（＝資本）」が，主体となって作動しているブルジョア経済のメカニズムを解明することと「生きた労働」が抑圧されていく事態，しかし，決してその事態に「生きた労働」は飲み込まれないでその事態を克服しようとする実践（活動）を明らかにすることである。

私は，『要綱』における上述の二つの課題を後者の課題から導出されているカテゴリー批判の仕方を解釈していっている。

15）前掲『資本論草稿集，2』490頁
16）前掲『資本論草稿集，2』494頁

4　カテゴリーの批判と形成

マルクスは，『要綱』においてブルジョア経済学の諸カテゴリーを検討，批判し，経済学批判のためのカテゴリーを形成する。「固定資本」「流動資本」カテゴリーに対してマルクスは，「不変資本」「可変資本」カテゴリーを対置している。マルクスは，「不変資本」「可変資本」の両カテゴリーの措定によって先行者の資本規定の混乱を，例えば，生産資本と固定資本，流動資本と流通資本の同一視，また各人の経験に基づく利潤源泉についての諸論述を統一的に整理した。

「不変資本」「可変資本」カテゴリーの形成は，「剰余価値」の発見を前提にしている。利潤源泉の発見によってマルクスは，商人，金融業者，生産者の立場，経験に幻惑された資本規定を統一的に秩序づけることを可能にした価値循環を措定することができた。また価値循環は，素材変態をその循環過程で取る表現態であるとの認識を可能にし，価値と素材の分離を可能にした。価値循環は，利潤源泉が，明らかになったことで措定されたということは，資本を絶えざる価値の増殖体として規定するということでもあった。[17]

『資本論』の読者にとって「不変資本」「可変資本」カテゴリーは，与えられたものである。換言すると「不変資本」「可変資本」カテゴリーを受容するということは，マルクスの解釈体系（パラダイム）を無意識的に受容しているということである。私が再三，強調していることは『資本論』を解釈するためにはこの解釈体系の検討は不可欠の前提であるということである。「マルクスは，不変資本と可変資本への資本の区別づけを確認することによって，はじめて，剰余価値形成の過程をその現実的経過において極めて詳細に叙述し，かくして解明するにいたった」とエンゲルスは述べているが，[18] カテゴリーの形成という観点からみるとこれは，逆である。

17）拙稿，「資本の諸変態とその循環」所収『山口経済学雑誌』31巻１・２号合併
18）K・マルクス『資本論』２巻．向坂・訳．エンゲルスの序言，岩波書店

私は，カテゴリーの形成を次のように考えている。すなわち，与えられているカテゴリー（用語）に意味を付与している既存の意味体系を新たな意味体系で置き換え，その用語に新たな意味を付与するとき，用語はカテゴリーとなるのである。『要綱』でマルクスは，新たな意味体系を確定せんと先行者のカテゴリーを検討するのであるが，検討に方向を与えたのが，剰余価値の発見である。マルクスのブルジョア経済学批判の方法を解釈するためには，私たちは「不変資本」「可変資本」カテゴリーを所与とするわけにはいかない。これらを所与としてマルクスに従うだけであるなら，私たちは『資本論』読みの『資本論』知らず，となるだけである。マルクスが，苦闘して獲得したブルジョア経済学批判の方法は，社会科学の方法としても一般的に通用するものであるが,[19] 残念ながら私たちは，これを見逃してしまうであろう。私の『資本論』解釈の仕方は，前節でのべているように『資本論』の諸カテゴリーを「労働の二面的性質の主体内的拮抗性」あるいは「生きた労働と死んだ労働の主体内在的弁証法的関係」に立脚して解釈していくというものである。つまり，マルクスが，苦闘して獲得した方法で『資本論』を解釈するというものである。例えば，マルクスが最も苦闘した貨幣カテゴリーの形成を扱っている価値形態論は,「労働の二面的性質の主体内的拮抗性」に基づいて展開されている。

ブルジョア経済学の諸カテゴリーは，マルクスにとって所与である。マルクス以外の人々は，彼らにとって所与であるカテゴリーを無批判的に受容して経済を把握し，説明している。カテゴリーを無批判的に受容するということは，彼らにとって現実を構成しているモノは，知覚されるとうりのモノであり，したがってモノは，その使用価値（具体）的属性，あるいは自然的属性として認識されている。認識主体にとってカテゴリーは，自然的事物の反映であると解釈される。だから，認識者に求められるのは自

19) J.ピアジュ『発生的認識論序説III』250頁．田辺・島雄・訳．三省堂．1980
J.Piaget『introduction à l'épistémologie génétique.3』PRESS UNIVERSITAIRES DE FRANCE.

然的事物の動きを正しく見る眼である。ここではモノを認識するとき，カテゴリーは，なんらの役割も果たしていないということになる。つまり，モノの認識においてカテゴリーの独自領域は存在しないということになっている。したがって，彼らにとって現実は，少しも不可思議なことはなく，至極当然の世界であった。ただ，マルクスだけが，そこに不可思議さを認め，経済を把握するためには与えられているカテゴリーを吟味しなければならないということに気付いていた。先行者の把握している現実は，マルクスの眼から見ると「生きた労働」を抑圧している「死んだ労働」の世界である。このような把握をするマルクスの眼は，対象を認識するためには対象を表現している用語（カテゴリー）をまず対象とし，検討するよう求める。マルクスは，いかなる視点から用語を吟味したのであろうか。用語は，意味体系の中である位置を占ることによって意味を付与されているのである。

カテゴリーを通じて「モノ（対象）」を把握するということは，「モノ（対象）」を意味体系に位置づけるということである。したがって，「モノ」とカテゴリーは，不可分であるのだから，所与としての用語を検討することなく，受け入れると「モノ」の意味をその感覚的知覚からのみ引き出すことになってしまう。「モノ」の把握におけるカテゴリーの独自領域を無視してしまう。「モノ」それ自体が，直接的に意識に反映し，「モノ」は，認識されると考えてしまう。したがって当の社会の「史性」を認識することができない。「モノ」の意味を理解するためには，所与としてのカテゴリーをそのまま受容するのでなく，カテゴリーの形成，発生を明らかにしなければならない。すなわち，カテゴリーを意味体系に位置づけなければならない。

私は，「モノ」を実践（労働）と実践（労働）の対象的諸条件と規定している。

「モノ」の意味と「モノ」の用語の関係は，シニフィエとシニフィアンの関係にある。私は，「モノ」の意味（カテゴリー）は実践によって規定されていると考えている。個々人の実践は，相互に関連しあっている。特に

市場の経済的実践は，全体として体系を構成している。私たちは，孤立したロビンソン・クルーソーの実践を想定するわけにはいかない。生産・分配・消費の過程の継続は，個々の経済的諸実践が相互に関連して体系化しているということである。経済的諸カテゴリーは，経済的諸実践の表現体であって，その意味内容は，経済的諸実践から与えられている。すなわち，市場の経済的諸実践はルーティン化し，一定の規則性を有しているから，経済的諸用語も経済的諸実践の体系によって意味を与えられているのである。しかし，人は経済的諸実践の部分を自己の経験，立場から解釈する。

このような解釈をする人は，用語はその意味を実践対象の属性，つまり人間にとっての効用から与えられていると考えている。経済的諸実践は社会的実践であるから，これに対応した社会的意味体系が存在している。

エンゲルスは「ラヴォアジェのプリーストリとシェーレにたいする関係は，そのまま，剰余価値論でのマルクスとその先行者たちとの関係である」と述べているが，ここで語られていることは，カテゴリーの対象認識における役割である。

先行者は，剰余価値に相当する部分を確認していたが，マルクスが，剰余価値を足場に先行者を批判することができたのは剰余価値用語を先行者とは違った意味体系（パラダイム）に，すなわち死んだ労働と生きた労働の拮抗関係に位置づけることができたからである。

私が，剰余価値カテゴリーを形成したというのは，かかる意味である。プリーストリやシェーレは，新たな気体を析出したのであるが，それを旧来の燃素説の体系に位置づけようとしたために「燃素説的な全観念をくつがえして化学を変革するはずだった元素も，彼らの手のなかでは実を結ぶことなく終わった」のである。[20] ラヴォアジェは，それを違ったカテゴリー体系に位置づけたことによって酸素の発見者となったのである。

ブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判とはブルジョア経済学者の経済認識の仕方を批判することである。マルクスは，彼らの経済認識の仕方を

20）マルクス『資本論』2巻，向坂・訳，エンゲルスの序言，18頁，19頁，岩波書店

次のように説明している。「経済学者たちの粗野な唯物論は，人間の社会的生産関係と，諸物象が受け取る，これらの関係のもとに包摂されたものとしての諸規定を，諸物の自然的諸属性とみなすところにあるが，この唯物論は，同じほど粗野な観念論，いやそれどころか物神崇拝なのであって，それは社会的諸関係を諸物に内在的な諸規定として諸物に帰せしめ，こうしてそれらを神秘化するのである」と。[21)]

ここで述べられている「社会的生産関係」と「諸物の自然的属性」の関係は，どのようになっているのであろうか。また彼らの経済（対象）認識の構造は，どうなっているのであろうか。

「関係」は，次のように二通りである。

一つは，事物の具体的属性を社会関係と（解釈している）みなしている，逆にもう一つは，社会関係を事物の具体的属性と（解釈している）みなしている。

前者と後者は同じ事柄を表現しているのではない。前者は，事物の具体的属性の表現体が社会関係であるということ。これを「事物の具体的属性→社会関係」と表示しておく。逆の場合が，後者である。後者を「社会関係→事物の具体的属性」と表示する。事物の具体的属性（＝諸物の自然的属性）とは素材の使用価値のことであり，感覚的に把握され得る。彼らの認識構造は，どうであろうか。

例えば，「鉄は，国家なり（鉄→国家）」という一文を見てみよう。この一文は，鉄の使用価値が，社会関係としての国家によって表現されている。つまり，鉄の意味内容が，国家を表現体としているということである。

逆は，「国家は，鉄なり」である。さて，前者も後者も，国家＝鉄，あるいは鉄＝国家と解するなら，差違はなくなる。しかし，前者の論述者と後者の論述者の認識方法は，違っているのである。違いは，両者が始めの一文を基に論理的解釈を続けていけば，はっきりしてくる。前者では鉄の共示としての国家の意味が，深められていくはずであるのにたいして，後者

21）前掲『資本論草稿集，２』567頁

では国家の共示としての鉄の素材的，使用価値的意味が，深められていく。前者と後者の意味内容は，解釈を続ければ続けるほど当然その乖離は大きくなっていくであろう。

違いは，主語として国家を置くか，鉄を置くかによっていることは明白であろう。前者の論述者，後者の論述者は，気まぐれに主語を選択しているのであろうか。そうではない。主語の選択は，彼らの歴史観，日常的実践（労働）によって規定されているのである。彼らの労働が，死んだ労働（価値）としての労働，つまり抽象的労働であるのか，それとも生きた労働，つまり具体的労働であるのかによって彼らの社会解釈(把握)，すなわち主語の選択は，－彼らは意識していないが－規定されているのである。

「死んだ労働としての労働（価値実践)」をしている人は，対象を価値的に把握している。所与としての諸カテゴリーから価値的把握に役立つカテゴリーを選択，使用している。生きた労働は，主体的，創造的であるから死んだ労働による価値システム，すなわち資本制経済システムを乗り越えようとする。生きた労働の実践者は，価値カテゴリーによる対象把握を批判し，価値カテゴリーの解釈体系にたいして生きた労働の解釈体系を対置する。彼は所与である諸カテゴリーの中から使用価値的把握に役立つカテゴリーを選択・使用しているのである。

5　まとめ

ブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判が，近代社会の運動法則の解明でもあるというマルクスの論理を解釈しておく。

ここで初めに引用したマルクスの一文，「商品に表示された労働の二重性」は経済学を理解するための跳躍点であるという一文を想起してほしい。

商品カテゴリーのうちに労働の二重性を読み取ることができることを先行者の諸論述を検討することによってマルクスは，発見した。ここで商品とは当時の人々にとっての一大関心事である富のことである。富を金・銀

のような貴金属とみなすか，国民の生活手段とみなすか，あるいは他の何かであると考えるかによってそれぞれの経済解釈は，違ってくる。違いは，富を決定づけている労働の違いによっている。ブルジョア経済学体系は，富を決定づけている労働（死んだ労働）の体系によって形成されている。このとき，富とは社会的富のことである。

解釈者は，所与としてのブルジョア経済学の諸用語を使って富の増大，分配の機構を解釈する。解釈者が，考えている富と社会的富が一致しているなら，彼の解釈は，社会的に確立されている解釈に近い。このとき解釈者は，社会のイデオローグとして活躍することになる。

プリエトは，イデオロギーを次ぎのように規定している。「イデオロギーと呼ばれるものは，物的現実の認識に関わり，この認識を自然化することを目指しているような言説，すなわち，この認識をその対象であるものからの必然的な結果として説明したり，またそう思わせたりするような全ての言説である。」[22)]

これは，既に引用しているマルクスの規定，つまり「具体的属性→社会関係」あるいは「社会関係→具体的属性」の言説と同じである。

マルクスにあっては，ブルジョア経済学の論述をイデオロギーとして認識し得るのは生きた労働（具体的的労働）と死んだ労働（抽象的労働）の主体における拮抗に基づく認識方法によっている。すなわち，マルクスは事態を常に二重の視点から考察している。これがイデオロギー批判を可能にさせているのである。

肝心なことは事態が労働の二面性を拮抗させている主体によって構築され，作動させられているということである。本節の冒頭で述べているマルクスの論理は要約すると以下のごとくである。先行者による事態の部分解釈を批判すると云うことは先行者の使用しているカテゴリーを死んだ労働（価値実践）の表現体系に位置づけるということである。マルクスにとっ

22) L.プリエート『実践の記号学』丸山・加賀美．訳　223頁．岩波選書，
Luis J.Prieto『PERTINENCE ET PRATIQUE』1975．Les Editions de Minuit.

て解釈とは表現体系に位置づけられている諸カテゴリーを読み取るということなのである。

私たちは再度,「固定資本」「流動資本」についての先行者の解釈をいかにマルクスが主体において拮抗している労働の二面性から批判しているかを見ておくことにしよう。もちろん『要綱』段階のマルクスがしていることは表現体系の「読み取り」ではなく，先行者のカテゴリーを批判し，自己のカテゴリーの形成である。固定資本（死んだ労働）は，生きた労働を吸収して巨大化していくが，つまり剰余価値を搾出し，蓄積を強化していく。しかし資本は他面では労働生産性の上昇によって必要労働時間を縮減し，自由な時間を創出する。かくて資本は自由な時間をいかにして剰余価値として実現するかという問題に直面する。

「資本の傾向はつねに，一方では，自由に処分できる時間を創造することであるが，他方では，それを剰余労働に転化することである。資本は，前者の点でうまく成功しすぎると,剰余生産に苦しむことになるのであり，その場合，剰余労働が資本によって価値実現されえないので必要労働が中断される」とマルクスは述べる。[23] まさに資本は，それ自身過程的矛盾ということである。資本が発展させた巨大な生産力は資本制経済の限界を突き破らざるを得なくなる。資本の本性は，資本の否定に至るとマルクスは展望する。このような展望は剰余価値の実現という経済システムから引き出されており，私たちが述べてきたところの死んだ労働と生きた労働との主体内在的弁証法的関係から導き出されたものではない。

実際，マルクスは次ぎのようにものべている。「労働時間の節約は自由な時間の増大，つまり個人の完全な発展のための時間の増大」に等しいということであるが，自由な時間を享受するには主体が生まれ変わらなければならない。[24]

労働を苦痛と感じさせ，休息を自由と感じさせる資本制経済を克服する

23）前掲『資本論草稿集，2』494頁
24）前掲『資本論草稿集，2』589頁

主体が育成されていくということもマルクスは,展望しているのである。[25)]

このような展望は次のような労働把握を根底にしている。死んだ労働としての労働（＝抽象的労働）は，歴史的に規定された労働であるが，生きた労働は，人間の本性である。したがって人間を前提にするかぎり，生きた労働は，潜在的になるとしても消失することはない。生きた労働は，労働の結末としては死んだ労働として対象化（価値化）されるが，しかし，その始源では価値化された世界を総体的に知覚する。世界の総体的知覚と疎外の感得は，裏表の関係にある。

プチの表現を借用すると次のごとくである。

「行為するとは，少なくともある瞬間に――もっとも，この瞬間ということが唯一本質的なことだが――行為することの潜在的な諸条件の，潜在的には無限の連鎖が，実際の現実性にくっついて離れないように，その行為の遂行の中に，自己の全体を集中することである。自己自身においてしか実在しないものとは主体である。主体として在る限り，労働は，自己自身の外へと労働を引っ張ってゆくであろうような対象化運動の中でとらえ直されはしない。労働はただ，その労働過程，あるいはその労働の活動性の中にしかなく,労働過程の結果の中に在るのではないのである。したがって，労働は，ただひたすら，その活動的な契機の中で把握されなければならない。」「生産過程そのものの中で，生きた労働は，道具と素材とを自らの魂の身体とし，そうすることによって，それらを死からよみがえらす。」死んだ労働（抽象的労働）は，生きた労働を喰いつくすことはできないが，「死んだ労働世界」では生きた労働は瞬間，瞬間の繋ぎとしてのみ存在する。[26)]『資本論』ではこのような死んだ労働と生きた労働の主体内在的弁証法的関係を読み取ることはむつかしい。

25）マルクス『資本論』3巻2部，向坂・訳，1024頁，岩波書店「必然性の国の彼方に，自己目的として行為しうる人間の力の発展が，真の自由の国が，といってもかの必然性の国をその基礎として，そのうえにのみ開花しうる自由の国が，始まる。労働日の短縮は根本条件である。」

26）プチ，前掲書　26頁　28頁